の難有所なりと、人々感涙せしとぞ、○又見二甲子夜話一

〔永代橋危難〕川岸に出ゝばしがほどやすらひて、橋を見わたしたるに、人のこみ合眞黑く、其中に幟、あげごし、かさぼこのかず〳〵、はやしたてゝわたる、何も見事の祭にて、見物のぐんゝゆ左こそと思はるれ、やがて小船を呼かけて乘つ漕出て見るに橋の杭のことにゆがみたるあり、其ひずみかうらんに見えたる、あやふき事よと見あげたるに、ねりゆくも此祭ばかりにて、橋の左右に立居たるぐんじゆ、一同にこの跡につきて、深川の方へわたらんとすなれば、西の方は人すくなく、まばらに見えし、既に川の中ばにも乘たらんと思ふほど、跡の方にて大せいの人聲すさまじく聞えければ、驚ふりかへり見るに、めり〳〵とひゞきて、さしも大きなる橋げた、たわみくぼむと見しが、中九尺ばかり板のあきたる處より落入る人々、千石どほうしへ米の落入がごとく、あまたのぐんじゆ左右より落かさなり、ゝばしはくがぢの如く、人のうへに人かさなりて、水に落入さま見るもいたましく、其聲耳もつぶるゝ計也、岸に有つる舟はみな漕出て、引上げ〳〵、又板子をなげ出し〳〵、是に取つき流るゝを引上げ助るもあり、○中略さてはじめの程引上し男女、死に及ぶべきも見えず浮出たるを、皆引上しは、四ツ半頃なりしが、其後追々に浮出しは、皆氣絶してありしを、引上々々おびたゞしき事ゆゑ、男女をわかち、老人小兒をも所をかへならべ置しを、ゆかりの人々尋あたりしは、さま〳〵に介抱し、又は連行も多かりし、其日は大橋もゆきゝをとゞめ、兩國橋のみ渡る事なれば、夜に入ても挑灯のゆきゝ、夜半ともゝられず、翌廿日には橋近き佐賀町に、假の役所御ゝつらひ、月番與力衆御詰、御檢使もとく濟て御引渡被成候趣を、町中御觸も有し程也、當日より其夜に至ても尋あたりて連行しは數ゝらず、訴て引取し分は、其名處もとゞめし事とて、其分男女小兒とも四百廿餘人と聞えし、○下略

〔永代橋凶事實記〕一御觸書之寫